

これならわかるぜ！

ためぐち漢文

——漢文の構造をわかりやすく知りたい君へ—— 漢文の句式編

【第10回】疑問の形（その他の疑問の形）

疑問の形は、文末に疑問の語気詞を置くものと、疑問代詞を用いるものが、なんといっても代表格だ。そしてその両方を用いるものも多い。

でも、それ以外にも疑問を表す形式はあるし、また、特有の形式をもつ疑問文もあるんだよ。

今回の講義は、疑問の形の最後として、それらを紹介しようかな。

1. 数詞「幾」を用いて疑問を表す形

「何人の人が来てますか？」ということを探ねる時、「幾人来てますか？」って言ったりするだろう？ え？言わないって？言つんだよ！で、この「幾」は、不定数を表す数詞なんだ。

たとえば、「三日」というのは、3つの日ってことで、「三」は数詞。

「幾日」というのは、3とか4とか決まらない不定の「幾」という数詞を用いた表現なんだ、つまり何日ってことだな。

え？それも言わないって？まったく君らはボキャブリーがブアーすぎるぜ！

「もはや余命は幾日もない」って、どういう意味だ？え？それならわかるって？…まったく。

さて、この不定の数詞「幾」を使った疑問の形式があるんだよ。

卿年幾。

▼卿年幾ぞ。

▽あなたは御年齢はいくつですか。

「幾」は数量や時間、程度を問う数詞で、ここでは単独で用いられている。

「年幾」という主述述語のなかに述語に相当して、年齢が「いくつ」であるかを問っているわけだ。

「いくばく」という日本語は、不定数を表す「いく」に、量や程度を表す接尾語「ば」がつき、さらに副詞を作る「く」がついてできたと言われているけど、要するに「どれほど」という意味だ。

さっき「もはや余命は幾日もない」って言ったけど、普通は「余命いくばくもない」って言うんだぜ。

「もう残された命はどれほどもない」ってことさ。

「幾」と同じく「どれほど」という意味を表す語には、「幾何」「幾許」がある。

薛公之地、大小幾何。

▼薛公の地は、大小幾何ぞ。

▽薛公の領地は、広さはどれぐらいですか。

「幾何」は、不定の数詞「幾」と疑問代詞「何」が複合したもので、やっぱり「どれほど・どのくらい」という意味を表すんだ。

張尹、莊、去、此幾許。

▼張尹の莊は、此を去ること幾許ぞ。

▽張長官の村は、ここからどれぐらい離れていますか。

「幾許」は、不定の数詞「幾」と、概数を表す数詞「許」が複合したもので、これも「どれほど・どれぐらい」という意味を表す。

◎ポイント……不定の数詞「幾」は「どれほど・どれぐらい」という意味を表す。「幾何」「幾許」も同様に用いられる。「くは」は「どれぐらいか」という述語を構成する。

A、幾。・ A、幾何。・ A、幾許。

▼Aは幾ぞ。・ Aは幾何ぞ。・ Aは幾許ぞ。

▽Aはどれほどか。・ Aはどれぐらいか。

ここまで紹介した例は、「幾」「幾何」「幾許」が述語として用いられた形だけど、連体修飾語として、名詞を修飾することもあるぞ。

一番最初に言った「幾日」とか「幾人」がそれだな。

受、學、幾何、幾何、幾何。

▼字を受くるは、幾何の幾ぞ。

▽学んだのは、どれぐらいの期間か。

これは「幾何」が名詞「歳」を修飾する例だ。

「幾歳」と言っても通るけど、「何年」という感じだな。

それに対して、「幾何年」は「どれぐらいの年」という感じかな？「幾許年」も同じだね。

◎ポイント!…「幾」「幾何」「幾許」は、名詞を連体修飾して、「どれぐらいの」という意味を表す。

幾 A

▼幾 A

▽何 A ・ どれぐらいの A

幾何 A ・ 幾許 A

▼幾何の A ・ 幾許の A

▽どれほどの A ・ どれぐらいの A

2. 疑問の兼詞（縮約語）を用いる形

「兼詞」ってのは、漢字1字で2字分を兼ねることばって意味。

中国では兼詞って呼ぶんだけど、あの「兼語」と紛らわしいよな。

へ？兼語って何だってーおい！使役の形で教えたじゃないか！そこ読み返しとけ！

で、何だっけ… そうそう、兼詞は兼語と紛らわしい用語だから、ためぐち先生は「縮約語」と別の呼び方で説明してるんだ、つまり、漢字2字を1字に縮めて約した語ってことさ。

古典中国語にはその縮約語がいくつもあるが、有名なのは「諸」だね。

「これ」って読むけど、ただの「これ」じゃなく、もうちょっと意味が加わってるんだ。

たとえば「子游問諸孔子」（子游、諸を孔子に問う）って文は、孔子のお弟子さんの「子游がこのことを孔子に問う」という意味だ。

これを「諸」を用いずに書けば、「子游問於孔子」となる。

つまり「諸」は「之於」2字分の音と近い、つまり日本語の音なら「シ・ヨ ↓ ショ」から、1字で2字の働きを兼ねていると言われるんだ。

だから、「これ」というよりは、この文の場合なら「これをくに」という意味をもっていることになる。

ところが、「諸」は「之於」以外に、「之乎」の働きもするんだぜ。

「之乎」も「シ・ヨ ↓ ショ」で、「諸」と音が近い。

そもそも「於」と「乎」は前置詞として似た働きの語だろう？

でも「乎」にはもう1つ文末で用いられて疑問や反語、詠嘆の語気を表す語気詞でもあるよね？

それで、疑問の形にも用いられることになるんだ。

子 聞^ク諸^ヲ。

▼子^シ諸^ヲを聞^キくか。

▽あなたはこれを聞きましたか。

はい、この例文、「諸」を用いずに書けばどうなる？

うん、そう！ 「子聞^ク之^ヲ乎^ヤ」になる。うんうん、理解できてるね。

つまり、「諸」は文末に置かれて、「これをくか？」って意味を表すわけだ。

この「諸」を文末に用いる疑問文でよく用いられるのが、次の形だ。

湯放^テ桀^ヲ、武王伐^シ紂^ヲ、有^リ諸[。]

▼湯^ヲ桀^ヲを放^チ、武^ヲ王^ヲ紂^ヲを伐^ツ、諸^有りや。

▽湯王が桀王を放逐し、武王が紂王を討伐した（事件）、これはあつたのか（＝これは事実か）。

こんなふうに、まず前の句で過去の事件を述べて、その後の句に「有^リ諸^ヲ」を置いて、「こんなことがあつたのか」と事実の確認を問いかける形をとる。

君らだって、「先生！うちの学校が昔火事で燃えたって、そんなことあつたんですかあ？」とか言うんだよ？それだよ。

「諸」が「之乎」2字分に相当するんだから、「有^リ諸^ヲ」は「有^リ之乎^ヤ」と同じ意味になる。

ところで、この形、訓読では通常「これありや」と読んで、「これあるか」とは読まないね。

とにかく、この「有^リ諸^ヲ」は、よく出てくる形だから、頭のノートに書いとけよ。

で、この例文に登場した「桀王」と「紂王」、前に部分否定のところで紹介した、漢文では超有名な暴君だ。

そうそう、桀王は肉山脯林（山のように肉を積み、林のように干し肉を並べる宴会）、紂王は酒池肉林（酒を池に満たし肉を林のように並べる宴会）と、どちらも贅沢三昧してさ、「それはなりませんぞ！」と諫言する家臣を殺したり、美女に溺れたりしたんだつたよね？

だから、桀王は殷の湯王に放逐されたし、紂王は周の武王に討伐されたわけ。

ところで、その殷の紂王が滅ぼされた事件は、殷周革命っていう。

武王方5万人ぐらい、紂王方は実に70万人という大軍という兵力の差があつたにもかかわらず、勝負は一方向的な武王の勝利だったと言われている。

なんでかって？ あくまでそう言い伝えられているって前提だけど、殷の兵士はほとんどが奴隷で、もともと武王の軍勢を待ち望んでいたんだとか…武王が率いる諸侯の連合軍が攻め寄せるや、武器をさかさま

に、つまり寝返って殷を攻めたと伝えられる。

ところが、『書経』という古い歴史書には、この戦いで杵が血で流れたと書かれてる。

そのことについて、後世儒家の孟子は「ことごとく書を信すれば書なきにしかず」（全部書経の記述を信じるぐらいなら書経なんてないほうがいい）なんて言っていて、そんなことあり得んと打ち消したんだ。

でも、本当のところは、結構血で血を洗う大激戦だったのかもな。

もちろん杵は、それで敵をなぐり倒す武器だけ、それが血の海の中にあっただってことさ。

孟子は武王のような人徳のある君主が、紂王のような暗愚な王を相手に激戦になるうはずがないと言いつたんわけなんだけど、さて、本当のところはどうだったんだろうね。

◎ポイント！…「諸」は「之乎」2字分の働きをする兼詞（縮約語）。文末に置かれて、「これをくか」という疑問を表す。

A^{スルカ} 諸。

▼諸をAするか。

▽これをAするか。

・「A^{スルカ}之乎」と同じ意味。

く、有^レ諸。

▼く、諸有^レりや。

▽く（という事実）、これはあったのか。

・「有^レ之乎」と同じ意味。「これあるか」とは普通読まない。

じゃ、次の疑問を表す縮約語にいろいろ！

君たちが漢文を習い始めた頃に、再読文字つてのを教わったろ？

その中に「盍」って字があったじゃないか？ なんて読んだっけ？

そう、「なんぞぞぞ」って、二度に分けて読んだっただよな。

つまり「盍」は、「なんぞ」（どうして）と「れる」（しないのか）の2つの意味を1字でもってるからなんだよ。

「盍」は、「は、」でいうして「しないのか」という意味だけど、これは単純にその理由を聞きたい場合なら疑問になるね。

「くするべきだろう」という思いが前提で問えば、反語になる。

そして「した方がいいから、どう？」してみない？「という思いがあれば、勧誘になる。

ま、使われる状況次第ってことだけど、ここでは疑問の例を紹介しよう。

子盍しゑ逃に之を。

▼子盍しゑ之を逃にれざる。

▽あなたはどうして逃れようとしませんか。

この例は、原典では問われた相手はその理由を答えているから、一応疑問文ということにしたんだが、これだって心の中では「逃げた方がいいのに…」って気持ちがあるかもしれない可能性があるだろう？

疑問文か反語文か、はたまた勧誘なのかなんて、もう紙一重の違いなんだよ。

だから、その違いは文脈から判断するしかないね。

ところで、この「盍」は、よく「何不しゑ」の「何不」の合字だと言われる。

日本語の音でも、「何不」は「カフ」で、「盍」も「カフ」だからね。

この説明は間違っちゃいないんだが、厳密にはちと違う。

もともと「盍」は「どうして」という疑問を表す語なんだ。

だから「どうして〜しないのか」は、やっぱり「盍しゑ不しゑ」なんだよ。

あれ？きょとんとしてるなあ… まあ続きを聞けよ。

ところが、この「盍」の古代音の末尾と、「不」の先頭音が同じなんだよ。

だから、早口で言つと、「盍」の中に「不」が飲み込まれてしまって、「盍不」と言つたつもりでも、聞き手には「盍」一字と同じに聞こえてしまう、そんな現象があったんじゃないかと、ためぐち先生は思うんだ。

ということとは、つまり？ そう、「盍」単体でも「どうして」という意味を表す例文はたくさんあるんだよ。

でも、もっぱら反語の例が多いけどな。

ちなみに、「盍」も「盍」と同様にちいられるぜ、注意しよう。

◎ポイント…「盍」は「盍」（何）と「不」の兼詞。「どうして〜しないのか」という疑問を表す。

盍しゑ Aせ。

▼盍しゑぞ Aせせざる。

▽どうして Aせしないのか。

・反語や勧誘にも用いられる。返って読む時は、「ぞ」の連体形「ざる」と読む。

3. 推測疑問を表す副詞「豈」を用いる形

「豈」という副詞がある。どの教科書や参考書も、普通は「どうして」って訳してる。でも、実はちよつと違うんだな。

反語の例を出した方がわかりやすいんで、それで説明するけど、「何盗之乎」という反語文は「どうしてこれを盗むだろうか。」(いや、盗みはしない。)"って意味だ。

そして、「何」を「豈」にかえて、「豈盗之乎」というのも、たいてい「どうしてこれを盗むだろうか。」(いや、盗みはしない。)"と同様に訳してる。

だから、君らは「そうか、『豈』は『何』と同じなんだな…」と思い込む。ま、当然だわな。だが、ほんとはちよつと違う。

「豈」は、「どうであろうっ?」と、相手や自分に一度疑いを設けてみる副詞だ。

たとえば、さっきの「豈盗之乎」は、「どうであろうっ?これを盗むか?」だ。

反語の場合は、その大前提として、「盗んだりするわけがない!」という思いがある。

そこで、相手に判断を委ねて、「どうであろうっ?」と疑いを設けてみるわけだ、そうやって考えさせて、「盗んだりするわけないだろう?」という言外の結論を想像させるんだ。

で、「どうだろう?これを盗むか?」は、つまりは「どうしてこれを盗むだろうか?」ってことになるから、そう訳してるわけ。

って、本当のところわかってそう訳してるかどうかは疑わしいけどな。

「豈」は反語でよく用いられるから、反語の講義の時にもう一度説明するけどな、でも、いいかい?まず、「豈」ってそういう副詞なんだってことを理解してくれ。

さて、この「豈」は必ずしも反語で用いられない場合がある。たとえば次の例だ。

荊卿豈有意哉。

▼荊卿豈に意有りや。

▽荊軻殿はなにか考えがおりますか。

始皇帝暗殺を依頼したにもかかわらず、いっこうに出発しようとしてない荊軻に対して、いらだった依頼主の太子丹が尋ねたセリフ。

これ、もし反語だったら、「考えがあるだろうか、いやない」になってしまっただろう?きっと何か考えがあるに違いないと思って尋ねてるわけだから、形式上は疑問だよな。

この例も「どうであろうっ?」なにか考えがあるのか?」と、「どうであろうっ?」という疑いを設けてみるわけ。

これはさすがに「どうして」とは訳しようがないだろう？
だから、「なにかがあるのか」と訳してるんだ。
なお、ためぐち先生は、「豈」のこの用法は推定だと思っ。

だから、推定の形の講義の時に、もう一度触れるつもりだけど、問いかけてるといえば問いかけてるんで、疑問の講義でも説明してるわけ。

ここでは出発の期日が過ぎても出かけようとしなない荊軻に対して、その出発しようとしなない事情を推測して問いかけてるんだな。

この例のように、「豈」が推定疑問を表す時は、「豈有く哉」（なにかがあるのか）の形をとることが多い。

まねに、「豈有く哉」とか「豈有く哉」と読まれることもある。

また、「豈有く哉」と読んであるものにも出くわしたりするけど、これは反語との区別がつかない読み方で、あんまりよろしくないね。

◎ポイント……「豈」は相手や自分に「どうであるっ？」と疑いを設けて問いかける副詞。推定疑問を表すことがある。

豈有 A 哉。

▼豈に A 有りや。

▽なにか A があるのか。（↑「どうであるっ？」A があるのか？」から

4. 文末に「不」「否」「未」を置いて選択疑問を表す形

「尊君在不。」（▼尊君在りや不や。▽お父様はご在宅ですかどうですか。（とか、

「視吾舌尚在否。」（▼吾が舌を視よ。尚ほ在りや否や。▽私の舌を見る。まだあるかないか。（、

「寒梅著花未。」（▼寒梅花を著けたりや未だしや。▽寒梅は花が咲いたかどうか。（のように、

文末に「不」「否」「未」を置いて、「いか、どうか」という選択疑問を表すことがある。

以上！

え？それで終わりか！って？ そりゃそうさ、「基本の否定」の講義で詳しく説明したじゃないか！

5. 「何 A 之 B」の形

「何 A 之 B」の形をとる文がある。

見かけ上は同じなんだが、実は構造的に全く違う 3 種類があるんだ。

だから、形の丸覚えでは、歯がたたんぞ！
一つひとつ順番に見ていこう！

①「何A」が述語Bの目的語の場合

「何のAをBするのか」という意味を表す時、通常の語順なら、「B何A」（何のAをBする）だよな？ だって、目的語は述語の後に置かれるんだから。

ところがこれを「何のA」を強めて前に出すと、「何A何B」となる。

これでもいいんだが、「之」を「何A」の後に置いて、「何A之B」の形をとることが多い。

倒置の形の講義の時に、また説明するけど、中国では「之」は語順の変化を示す標識として働いている構造助詞と言われている。

ま、これはいかにも合理的な解釈だよな。

でも、本来はこの「之」は前に置かれた「何A」を「之」が再指示して、「何のA、それをこそ」と強める働きをしてるんだと思う。

「之」のこの働きを復指というんだが、ことが単なる標識なんてわけがないんであって、そういう働きをしてるんだと、ためぐち先生は思うよ。

だから、「B何A」が「何のAをBする」なら、「何A之B」は「何のAをこそBする」のようになるかな。

王何卿之問也。

▼王何の卿をか之れ問ふや。

▽王様、どんな卿（＝要職にある大臣）のことをお尋ねですか。

これは本来の語順なら、「問何卿」になるよね。

つまり、目的語「何卿」を倒置して述語「問」の前に出したもの。

そして、語順の変化、すなわち倒置を示す標識の働きをする構造助詞「之」を置く。

別の言い方をすれば、「何の卿をこそ」の「（それ）をこそ」（之）の復指の働きで、「何卿」が強められてるわけさ。

この「何A之B」という形式は、実際には反語で用いられることが多いから、反語の講義の際にももう一度注意喚起しようかな。

それと、ここでは割愛するが、もちろん「何A之B」という場合もあるぞ。

たとえば、「何教之従」は、「従何教」の目的語「何教」を倒置して「従」の前に出したものさ。で、構造助詞「之」を置いて、「何の教えにこそ」と強めるわけだ。

この違いは… え？ 『何_レ教_レ』は依拠性の目的語でしょ？ だって？ す、すばらしい、よくわかってるじゃないか。

その依拠性の目的語を前に出す「何_レA_ニ之_レB_{スル}」も、多くは反語で用いられるんだ。ちなみに、これらの形、確認判断の語気を表す語気詞「也」が文末に置かれることが多い。その場合、訓読ではさっきの例のように、「なり」「ではなく」「や」って読む。

◎ポイント… 「何_レA_ニ之_レB_{スル}」の「何_レA_レ」が動詞Bの目的語の場合は、「何_レA_レ」が「B_{スル}」の前に倒置されたもの。この時、構造助詞「之_レ」が「何_レA_レ」の直後に置かれる。

何_レA_ヲ之_レB_{スル}

▼何_レA_ヲをかBする。

∴「B_{スル}何_レA_レ」の倒置表現

▽何_レA_ヲをBするの。

「何_レA_レ」はBの他動性の目的語

何_レA_ニ之_レB_{スル}

▼何_レA_ニかBする。

∴「B_{スル}何_レA_レ」の倒置表現

▽何_レA_ニにBするの。

「何_レA_レ」はBの依拠性の目的語

- ・これらの形は反語で用いられることが多い。
- ・文末に語気詞「也」が置かれることもある。その場合は「也」を「や」と訓読する。

② AとBが主語と述語の関係の場合

「何_レA_ニ之_レB_{スル}」の文が、さっきのぼつかりだったらいんだけど、そうはいかないんだ。AとBが主述関係の場合があるんだよ。

どういうことって？ つまり、「何_レ+_レが(主語)+_レ之_レ+_レどじする・どじである(述語)」の形になっていることがあるんだ。

こんなふうにならば一般化すると、かえって何がなんだかわからんなあ… 例文で確認した方が早いかな。たとえば次の文、「何_レA_ニ之_レB_{スル}」のAとBはそれぞれの語だい？

此_レ非_{ザル}吾_レ君_ニ也、何_レ其_レ声_ニ之_レ似_{タル}我_レ君_ニ也。

▼此_レ吾_レが君_ニに非_{ザル}なるなり、何_レ其_レ声_ニの我が君_ニに似_{タル}るや。

▽この人はわが君ではないのに、どつしてその声が我が君に似ているのか。

「何、其、声、之、似、我、君、也」の部分を見てくれよ。

AとBがそれぞれどの語か確認できたかい？

うん、そう、「其、声」がA、「似」がBだよな。

この文は、「その声がわが君（の声）に似る」という意味だから、「其、声」と「似」の関係は主語と述語の関係だろう？

このように「何、＋らが（主語）＋N＋どうする・どうである（述語）」の形をとるとき、「どうしてが（このように）くするの」と訳すんだ。

え？「その訳の『このように』ってのは何か」って？

うん、難しい質問だな…

逃げた言い方になるけど、現代の中国ではこの形式の「之」を「このように」って訳してるんだよ。

指示代詞の働きと説かれていると言ってもいい。

ただ、ためぐち先生としては、果たしてこの「之」が語法的に、本当にそんな意味を表しているのかが甚だ疑問なんだ。

先生自身はこの「之」は、やっぱり主語と述語の間に置かれて名詞句を作る用法の一種なんじゃないかなと… たえばこの例なら「なにゆえのその声の我が君との類似だ！」という文なんじゃないかな？と思ったりもするんだが、まだ確証は得られていない。

え？そんなことってあるのかって？ もちろんさ！ 学問の世界はまだまだわからないことだらけなんだ。でも、わからないからこそ、本当のところはどうなんだろうって考え続ける、それこそが本当の学問じゃないのかい？

ためぐち先生も、まだまだわからないことだらけだよ、だから楽しいんだよ！

と、思わず力が入ったが、この形については、なおも今後の研究が待ちたいところだね。

ちなみにこの形も反語や詠嘆の意味で用いられることが多い。

何、楚、人、之、多、也。

▼何ぞ楚人の多きや。

▽どうして楚の人が多いのか。（↓なんと楚の人の多いことよ。）

劉邦率いる漢軍と項羽の楚軍の攻防の最後に近い「四面楚歌」の場面だ。

垓下に追い詰められた項羽が、夜、四面みな自分の祖国の楚の歌に満ちているのを聞いて、「漢軍はみなすでに楚を占領したのか」と驚き、思わず口にした言葉だね。

これも「楚人」と形容詞の「多」が主語と述語の関係だろう？

この文は教科書や参考書では、詠嘆文と解されているけど、本来は本来疑問文だ。

一応現在の主流の解釈では「なんで多いのか！」という意味だけど、その驚きが「なんと多いことよ」という詠嘆の気持ちにつながるわけだ。

この場合も、「之」は「このように」とか「こんなにも」と訳すというのが通説。でも、さっき言ったように、先生自身、ほんのどころどうなのかな？って疑わしく思っ、「このように」という訳がなくても間違いないと思っから、いちいち付けなくてもいいぜ。え？ちなみに先生はどういう意味だと考えてるのかって？うくん、あくまで先生の想像だけ、「なん」という楚人の多さだ！」だね。

大声で言うなよ、まだ確証は得られてないんだから。

◎ポイント…「何 A 之 B」の、A と B が「主語 + 述語」の場合は次の意味を表す。

何_レ A 之 B_{ナレバ}。

▼何ぞ A の B する(や)。

∴ A と B は主述関係

▽どうして A が B するのか。

何_レ A 之 B_{ナレバ}。

▼何ぞ A の B なる(や)。

∴ A と B は主述関係

▽どうして A が B であるのか。

・「之」が「このように」・「あのように」という意味を表すという通説があるが、口語訳に反映させてなくてよい。

・この形は反語や詠嘆で用いられることが多い。

・文末に語気詞「也」が置かれることもある。その場合は「也」を「や」と訓読する。

③ A と B が述語と補語の関係の場合

混乱させといて悪いんだが、「何 A 之 B」の形には、さらにもう1つあるんだよ。

それは、B が述語 A の補語という関係だ。

つまり、A することの程度や状態を B が表してる関係だね。

まず、例を見てくれ。

大姉、何_レ藏_ノ之_レ深_キ也。

▼大姉、何ぞ藏まるることの深きや。

▽姉上、なんと深く隠れておられたことよ。

「藏」という述語の状態が「深」と示される関係だね。

古典中国語文法では、こういう「深」みたいな働きをする語を補語と呼んで、述語に意味を補う語と説明してるんだ。

だから、「隠れることが深い」ではなく「深く隠れる」と解釈するわけ。

さっきの形と同じで、この場合も「之」を指示代詞として「このように」と解釈するのが通説。

つまり、「どうしてこんなに深く隠れているのか」と解釈するんだけど、そいつを疑わしいと思ってるのがこのためぐち先生さ。

え？「こ」でも先生の解釈が聞きたいって？ 大きな声で言うなよ、「姉上、なんとこの御隠遁の深さです！」だ。

つまり、先生は述語「蔵」と補語「深」の関係ではなく、「蔵」之「深」を名詞句じゃないかと思ってるんだが、本当のところはどうなんだろうね。

◎ポイント!…「何 A 之 B」の、A と B が「述語 + 補語」の場合は次の意味を表す。

何_レ A 之 B_ト

▼何ぞ A の B なる (や)。

… A と B は述補関係

▽どうして B (の状態) で A するのか。

・「どうして A が B であるのか」と訳してもよい。

・この形も「之」が「このように」・「あのよう」・「このよう」という意味を表すという通説があるが、口語訳に反映させなくてよい。

・文末に語気詞「也」が置かれることもある。その場合は「也」を「や」と訓読する。

6. 「何_レ其_レA_{スルヤ}」の形

その他の疑問の形の最後は、「何_レ其_レA_{スルヤ}」の形、「**どうして A するのか**」という意味なんだけど、この「其」がまたどういう働きなのか、諸説あるところなんだ。

単に「何」の後について語気を強めてるっていう人もあるし、いやいや指示代詞の働きで「そのように」って意味なんだという人もあって、どうもはつきりしない。

でも、君らの場合、とりあえず「どうして A するのか」って意味だっことと、この形も反語や詠嘆でも用いられるってことを押さえておいてくれれば十分さ。

夫子_ハ聖者_ヲ与_フ。何_レ其_レ多能_セ也。

▼夫子は聖者か。何ぞ其れ多能なるや。

▽先生（＝孔子）は（本当に）聖人ですか。（それにしても）どうして多能であるのか。（↓なんと多能であることよ。）

この例、「其」を「あのよう」「と訳して」「どうしてあのよう」に多能なのか」と訳すこともある。でも、はっきりしないとこなので、君らは「其」を訳さなくてもいい。

『論語』が出典のこの文は、聖人はゆったり構えるもので、細々と多能であるべきではないという前提。もちろん疑問で解釈することもできるし、訳に示しておいたように感嘆・詠嘆でも解せる。

それは、そもそも疑問、反語、詠嘆が、似た心理状態を背景にするものだからだよ。

さっきの「何楚人之多也」だって、そっだったろ？

「どうして多能なのか？」という素朴な疑問の場合だってあるし、多能じゃだめじゃないかという思いを背景に「どうして多能なのか？」と問いかけることだってある。これが反語だよな？

それに対して、「どうして多能なのか、すごいなあ…」となれば感嘆・詠嘆になる。

この例文、感嘆・詠嘆でも訳せるって言ったけど、聖人たるもの多能ってのはちよいと変じゃないの？ ゆったり構えてへんやん！ 聖人ちゃうんとちゃう？ なんて気持ちを背景にすれば反語と解釈することだってできるよね。

疑問なのか、反語なのか、はたまた感嘆・詠嘆なのかについて、うるさくこだわる先生もあるって聞くけど、はっきりわかることもあれば、わからんことだって普通にあるぜ。

言った本人に聞いてみなきゃわからん場合もあるんだから、あんまり細かくこだわる必要はありません。

◎ポイント……「何其A」「何其A」は、単純に「どつしてAするのか」という疑問を表す。

何其A_{（や）}

▼何ぞ其れAする（や）。

▽どつしてAするのか。

- ・「其」が「そのように」という意味だという説もあるが、訳さなくてもよい。
- ・この形も反語や詠嘆で用いられることが多い。
- ・文末に語気詞「也」が置かれることもある。その場合は「也」を「や」と訓読する。

さて、君たち、よくがんばったね。

疑問の形は種類も多くて、語法学習の大きなハードルだったもんな。

次の講義は反語だ。

今日はゆっくり休んでくれ。